

# 詩とは何か

——W・S・マールウィンとバーナード・ウエストの作品

森田 孟

可憐な掌篇詩がある。題して

詩 Poetry

ミネルヴァ・カースベルク  
(Minerva Kaarsberg)

詩とは私にとって こういうもの……

赤ちゃんの口付けの柔らかさ、

そっと世話をする優しい声、

揺り椅子の律動、

戸口から流れ込む日光、

床で戯れる子猫、

絹の襟巻の光彩、

壁で光り輝く鏡、

しばらく座っている一日の一時、  
サウザン

微笑みながら去ってゆく夢、

もごもご言いながら……中へお入りと

私を招き入れる家、それが詩なのです。

Poetry to me is this…

The softness of a baby's kiss,

The gentle voice that eases care,

The rhythm of the rocking chair,

The sunlight streaming through a door,

A kitten playing on the floor,

The colors in a silken shawl,

A shining mirror on the wall.

The time of day to sit awhile.

A dream that leaves one with a smile,

A house that hums...and beckons me

To step inside is poetry.

成程、〈詩〉がこういうものなら確かに嘉されてしかるべきだろうと、ほのぼのと心暖まる思いで読者も、この「詩」の「家」の中へのこのこと誘い込まれてゆくに違いない。だが、その途端、同時に、〈詩〉とはこれとは全く別の、むしろ真反対のものでもあり、そのほうが〈詩〉としての価値がむしろ高いのではないかとさえ思わせるところに、このカースベルクの「詩」の値打が、もう一つの一層重要な意義が、あるだろう。

老人の臨終の硬く皺立った蒼黒い顔、邪慳に扱って不安を煽る怒鳴り声、大地震の家を軋ませ揺るがす震動、扉を突き抜け閃く嵐の雷光、怪我して帰ってきて苦しむ猫、荒織り布の襦袢の垢じみた汚れ、壁でガラスが割れて不気味に歪み光る鏡、屋内外をせかせか動き回らざるを得ない一日の時間、寝汗をぐっしょりかかせる恐ろしい悪夢、悪態

をつきながら早く出てゆけと追い立てる家……

そういうものもまた、読者に大なり小なりの衝撃を与え、頭を強烈に働かせ、心を深く激動させて、その人を新たに〈活性化〉するなら、立派な〈詩〉だと直ぐ反省させるところに、この、「詩」なる語で始まり「詩」なる語で終る、二行ずつ押韻する十二行の可憐な短詩の値打が認められよう。

米国はテネシー州の州都ナッシュビル(Nashville, Tennessee)で、年に八回発行されている『理想像』<sup>アイデアルズ</sup>と題する全ページが実に美しいカラー印刷の、上品で華麗な家庭画報風の雑誌(*Ideals*, vol.47, No.5, August 1990, p.20)に発表された作品で、作者は市井の一読者であろう。幸せに暮らしている温厚な、心暖かい、優しい女性を髣髴とさせる、微笑ましい佳い作品である。それは十分認めた上でだが、改めて申すまでもないが、私が〈詩〉として賞讃し対象とするのは、別の類のものである。

詩人が下した〈詩〉の定義としてすぐ想起されるのは、「詩とは『である』と三十八項並べたカール・サンドバーグ(Carl August Sandburg, 1878-1967)のそれであろう。

仮の（最初の見本の）詩の定義集

TENTATIVE (FIRST MODEL) DEFINITIONS

OF POETRY

- 一 詩とは、律動の沈黙の向うへ、その沈黙を、はつきり意図した反響・音節・波長で以て破ろうと手配された、一つの投射である。
- 二 詩とは、人間の言語という恐ろしいまでに可塑性のある素材で実践された一つの技芸<sup>アート</sup>である。
- 三 詩とは、人々が「聞いて！」と「見た？」「聞いた？何だったの？」と言う時の二つの瞬間の、含蓄<sup>ニテンス</sup>を報告するものである。
- 四 詩とは、ある有限の音の軌跡を、その反響の無限の点まで辿ることである。
- 五 詩とは、終止符<sup>ドット</sup>、線記号<sup>ダッシュ</sup>、綴り字の深遠さ<sup>(1)</sup>、暗号、交差光線<sup>(2)</sup>、及び、月の鬼火の続発したものである。
- 六 詩とは、ロケット花火の乗り手と、深海の潜水夫とが、第六感と第四次元についておしゃべりをする、人形芝居である。
- 七 詩とは、水を噴き出す青銅製の山羊の顔と、新鮮な

飲料水の通路に、細い裂け目を作ろうと計画することである。

- 八 詩とは、一つの思考、二つの思考、そしてそれらに織り混ざるもう一つ別の思考の、時が刻む拍子の周りで、堅く締まった引き結び<sup>(3)</sup>である。
- 九 詩とは、影の踊り手に、ペアを組む相手になつてくれと頼む木霊<sup>エコー</sup>である。
- 一〇 詩とは、陸上で暮して空を飛びたいと望む海洋動物の日誌である。
- 一一 詩とは、地平線の中に余りにも早く消え失せてしまふので説明のしようもない生命<sup>いのち</sup>を説明する一連<sup>つらな</sup>りのものである。
- 一二 詩とは、両者の間に判読不能の誓いがある鱗と翼が、化石として岩<sup>の</sup>に遺つた跡である。
- 一三 詩とは、内側にも外側にも在る別の眼に見えない振り子と連結している振り子の、展示である。
- 一四 詩とは、渡つてゆくノガモで暗くなった空である。
- 一五 詩とは、未知のものど知り得ぬものという障壁を射抜く音節を、探求することである。
- 一六 詩とは、埃、血、夢の親指の痕が付着した扉の把つ

手の概略を描いた写生帖からのどこかのページである。

一七 詩とは、楽しみ、憎しみ、愛、死のアルファベットを表すタイプ印刷体の意匠である。

一八 詩とは、飛魚の釣り餌に使う中空の銀の錘に詰め込まれた五つの神秘的な希いに到る暗号の鍵である。

一九 詩とは、春の青空を背にして白い風の中を飛翔する風の尾に繋がれた風船に閉じ込められた謎々を結びつけた、黄色い絹のハンカチの定理である。

二〇 詩とは、この上なく荘重で厳かな葬送行進曲に、テンポの速いタップダンスの愚行を適合させようとする舞踊音楽である。

二一 詩とは、黄金の蛙の腹中に迷い失せた月の小片である。

二二 詩とは、百万ドルを見つけた叫びの模造品であり、それを失くした笑いの模造品である。

二三 詩とは、一本の花の湿った腕にいてる根と、その花の日光に照らされた開花との間の、沈黙と発言である。

二四 詩とは、生命を育成してからそれを埋葬する大地の

逆説を、引き具で繋ぐことである。

二五 詩とは、一瞬の間に見えるものについて丹念に推測する人々を置き去りにしたまま、扉を開け閉めすることである。

二六 詩とは、夜の間織り上げながら待ち望んでいた月光に照らされていた時間の物語を語り告げる、端々しい朝の蜘蛛の巣である。

二七 詩とは、鏡、水溜り、空が変化するように変化する数と象徴を備えていて、決して変化しない唯一の記号は無限を表す記号だけであるような、一連の方程式の陳述法の一つである。

二八 詩とは、眼に見えない記念品の携帯袋である。

二九 詩とは、ある人が「おおー」と言い、別の人が「どのように？」と応えるように、橋と警笛との間に放出される、川霧と動いてゆく舟の明かりとの一断片である。

三〇 詩とは、静止状態の音節を動きのあるように按配することである。

三一 詩とは、星々への困難な道を行く、横腹に泡の汗をかいた馬と血塗れの拳と骨に釣り合った、最も安易な

道にして且つサクラソウの小径(4)の、算術である。

三二 詩とは、紐で繫いだ諸事実でしつかり留められた幾箱（シヤッフル）もの幻想を、組み替えることである。

三三 詩とは、小鳥、蜜蜂、赤子、蝶々、昆虫、幼児、バーバヤーガス及び、二足動物を数え上げて、彼等を無理やり駆り立てて砦をうるたえさせることである。(5)

三四 詩とは、虹はどのようにして出来て何故消え去るのかを語る幻影の、書き方の一つである。

三五 詩とは、白い蝶の翅（はね）と破られた恋文の反古とを、暗喩で確かに繋ぐことである。

三六 詩とは、ヒヤシンスとビスケットとの統合を達成することである。

三七 詩とは、火、煙突、ワッフル菓子、三色スマイル、人々、及び、紫色の日没から成る神秘に満ちた感覚に訴える数学である。

三八 詩とは、絵画、歌、勘（フレア）を、熟慮された言葉の三稜鏡（フリズム）で捕えることである。

### 訳注

(1) spelling depths 「語句」を深く使うことを示唆するか。

(2) cross-lights 一条の光だけでは照らせない場所を照らすために、それと交差させて照らす別の光。譬喩としては、他の角度からの観察、別の見解。

(3) slipknot 結び目の一端を引けばすぐ解ける結び方。

(4) the primrose path サクラソウ（桜草）の小径とは、「歡樂の道、放埒・享楽生活、放蕩暮らし」。「the primrose path of dalliance」(Shakespeare, *Hamlet*, I, iii, 50) 「気儘な恋の戯れ」／「安易で魅惑に富むが危険な道・方針」。

(5) この第三三項の全文、「Poetry is an enumeration of birds, bees, babies, butterflies, bugs, bambinos, babyagas, and bipeds, beating their way up bewildering bastions.」一読明瞭なように「b」の頭韻語を十一語並べてある。音の羅列と、これらの語のイメージが飛翔して喚起する世界を、詩人らしく楽しんだものだろう。尚、'babyagas' は 'Baba Yagas' (スラヴ民話に登場する妖魔・魔女)。後に、パリに設立された女性専用の老人ホームの名称。

各々色々と熟考した挙句、納得したり、そういうものかと眉につばをつけながら無理に同感してみる向きもあれば、何しろ詩人なのだからまあ適当に何でも好きなように言ってくれと、横を向いて微笑笑する人もいるだろうか。〈詩〉の定義などというものは所詮そのようなものではあ

るまいか。などと分り切ったような覚ったみたいなきことを言うのは、〈定義〉や〈理論〉をともすれば重視してきた当方としては、大いに気が引けはするのだが。私には、「六」「七」「一〇」「一九」「二六」「二九」が大変面白いと思われる。「二四」は、イメージが鮮明でよく〈分る〉定義だが、もう少し濃密な描写してもいいかと思われるものの、こういうあつまりした透明なものも混じっているのが、さすがに実作には短詩の多いサンドバーグらしいところか。

「二八」の、五つの希い、とは何だろう。特に有名な一項だが「三六」の、ヒヤシンスとビスケットの統合、とはどういうものだろう。まあ、どうぞ各位、考えてみて下さい。

この「定義集」、長篇の標題作以下多くの短詩を集成した全一六二篇から成るサンドバーグの五冊目の詩集『おはよう、アメリカ』*Good Morning, America* (1928) の巻頭に、全てイタリック体で掲げられたもので、この詩集の諸作はこういう定義に基づいている、あるいは以下の諸作からはこういう定義が生じる、筈だという、作者の揚言だろうか。

それにしても何故三十八項なのか。必然必須の数とはとても思えないが、多分、詩人自身、この辺りまでで定義作り「発見」に倦んだものか。と言うより、「仮の」一つの「見本」として、他の定義を促すサンドバーグの謙虚な進取の気性を示すものと見做したい。全五六巻から成るリンカーン伝の大著を表した、この大統領研究の一大権威でもある、所謂〈シカゴグループ〉を代表する詩人である。

詩人が下した詩の定義と言えば、一層洗練されたものは昔から数々あるが、マリアン・ムーア（後出）がその名作「詩」の中で示した「ヒキガエルの実在する想像上の庭々」*“Imaginary gardens with real toads in them”* を差し出すもの、とか、ウォレス・ステイヴンズ（後出）が「アデアジア」*“Adagia”* で下した数々はよく知られているし、ケネス・コークの瞳目すべき詩論詩「詩という芸術」(Kenneth Koch [1925-2002], *“The Art of Poetry” in Poetry, January 1975*——後出「参考文献」) など忘れられないが、ここでは触れないままにして、先を急ぎたい。

詩作品は全てが、各々、当然ながら、それが真物か否かはともかくとして、これこそが〈詩〉だと自ら主張しているものである。本稿では、実はこれまでの拙稿もそうだった

たのだが、「真物の」〈詩〉だと当筆者が見做す〈詩〉二篇を観てみよう。

まず、W・S・マールウィン (William Stanley Merwin, 1927-) の作品である。

彼は、ニュージャーシー州、ペンシルヴェイニア州で育った。プリンストン大学卒業後はフランス、ポルトガル、マヨルカ島などで私講師として働き、フランス語、スペイン語、ラテン語、ポルトガル語の翻訳で生活し、英国、メキシコにも住んだ。

最初の詩集『ヤヌスのための仮面』*A Mask for Janus* (1952) が、〈エイエール青年詩人シリーズ〉に W・H・オーデン (後出) によって選ばれたのを初め、『梯子の運び手』*The Carrier of Ladders* (1970) と『天狼星の影』*The Shadow of Sirius* (2008) は共にピューリツァ賞を受けた他、全米図書賞 (2005)、ホリンゲン賞 (1979) を詩集で受賞しており、彼の『訳詩選集』*Selected Translations, 1948-1968* は、一九六九年の、PEN 翻訳賞を授与された。これまでに受けた賞は三〇に及ぶ。

現在までに詩集二九冊、散文作品九冊、戯曲三冊、翻訳

二七冊、編著二冊、総計七〇点の多作ぶり。翻訳の中には、ダンテの『神曲』の第二部「煉獄篇」*Purgatorio* (2000)、蕪村の俳句集の英訳 *Collected Haiku of Buson* (2013) まである。

ハ)では、『アメリカ最優秀詩選集』*The Best American Poetry* (Scribner Poetry) の一九九六年版 (pp.128-34) に選出された四行詩一連から成る総計二〇四行の長詩 (初出 *Poetry* 誌) を取り上げよう。この作品を書いた頃、作者は、ハワイ州マウイ島の「ハイク」と呼ばれる所に住んでいた。

#### 詩人への哀歌 *Lament for the Makers*

私は幼少の日々からずっと  
よく憶えているが 常に

一同の中では最も若かった  
私の後からの妹一人を除いて

夕食のテーブルの下を 私が  
歩けるようになって それで

即座に罰せられた時から  
自在板が私の上に落ちかかりそうだったからだ

父と母と 頭上では

皆が話を交しており 彼らの言っている事は

大方は雲になっていて既に知っていたのだ

余りにも古くからの 私への指示を

学校では私は一学年飛び級したので

その後私が何をして

毎年 誰もが年上に

なり 私に重く圧しかかることになる

大学では友人の多くは

帰還兵で

ある権威を備えており

私は讃えたり 彼らは私を扱った

何年か年下の子供として

それで私は彼らに見せつけようと中途半端に結婚した

そして新たに己惚れながら耳を傾けたのだ  
私について取り沙汰された時

私がい分若かったこと 衝撃を受けたことを

私はその仲間うちで最年少だった

私は思ったのだ 私自分がそうなるようにしようと

それで私は信じている それが私には重要なことだっ

たのだと

そして私自身の状態のようだったのでそこに留まっていた

しばらくの間 それからあの日がやって来たのだった

私は別の国にいて

他の年上の友人たちが私の周りにいた

私の若さはその時までには当然と思われており

分っていた それは取って替られていたのだと

ある詩華集の中の注釈に

私その後で生れた人々を羅列していた

どれ程長々とそれは続いていたことか



どういふわけで私が全くそれ程若くはなり得ないと

氣付けなかったのか また 誰も

わざわざ私に知らせてくれなかったか

尤も私のいい気な希望は更に長く続いたのだが  
もっと若かった頃希つたよりは

ある表現はもつとしばしば浮んできて

自ずから私に示されたのだが

その秘密はまだそこに留まっていた

無防備な空気の中で安全なまま

あの活力はそれ自身の言葉でのみ  
プレス

私が子供だった頃に私に歌いかけていたもので

あり 私を否応なく捕えてそれを伝えていたのだ

ただ それを述べる言葉だけで

尤もそれは完全にあの言葉で

私にはつきり分るように鳴らし告げていたのだった

変ることのない倍音で

私はずっと耳を傾けてきたのだ その時以来

あの調べが果てしなく

いつでも私を越えて様々に変化してゆくのに

見つけようとしたのだ それがどこから来るのか  
そしてどの言葉へと向って行くのかを

そしてその後 絶えず

存在するのかを 私に保たれ続ける思いのままに

私の母と毎日の私たちの

生活がすり抜け去ってゆきそうだと

あの夏のように そして突然

全ては私から奪い去られてしまうのではないかと

しかしそれが存在することは私には

時々言葉で分つていて消え去つたりはしないだろうし

もしそれが一度でも私を擁護してくれるのだったら

それはそこに留まって 私であってくれるだろう

どれ程僅かしか そのような言葉を選んで

その後ずっと耳を傾ける人がいないにしろ

そこに私は眼覚めて見ようとするだろう

私には不変とみえた世界を

思うにそれは私が当時と

同じように若いと思っていたことで その調べが

歌ったのは誰かの言葉からで

二十代の頃私が私の周囲に見ていたのだが

全ての当時存命の詩人たちに対してだった

それでその詩行はずっと

滋養物であり仲間であり

光であった 長年私には

私は見出したのだ 彼らの顔々の肖像を

初めて楕円の余白の列の中に

オスカー・ウィリアムズ(1)の『珠玉集』の中の

それで彼らは長らく私の前に住みついたし

常に同じ状態であることだろう

あの 隔たった彼らの名声の点で

すっかり不滅となっていることだろう

彼らの生涯の間中 その間私(2)の周りでは

全てが森で 列車から見えたのだが

ちらっと見えたかと思うと再び過ぎ去ってしまうのだった

そういう不滅の人々は絶えず

幾分か私を励ましてくれたのだった

ここでまず (2) デイラン・トマスがいた

我らから離れた (3) 〈白馬〉から

レンガの壁へと私は眼を瞠って注意を凝らした

長年私(4)から通りを隔てた向うを

それからステイヴンズの死の知らせが

もたらしてくれた 沈黙についての新しい知識を

結局そこにはない無を

汝私(5)で 〈あれ〉と言っている雀を

どれ程長いこと彼の長い曙光(6)が影響を

及ぼしてきたことか 頭上の闇に

私が私の親しんだシェリーから眼を上げ

アロースミスが最初に彼を私に示してくれて以来

そして彼の死から間もなく

エドウィン・ミューアがやはり倒れてしまった

あの晩年の日の見事な鐘ベルが

未だ十分に聞こえてくるような気が私にはする

シルヴィア・プラスがそれから 彼女自ら

見知らぬ方へ向かっていった

彼女の最後の星々と詩から離れて

私から二、三ブロック先の家で

ウイリアムズがその少し後で

運ばれて行った 黒い急流によって

彼が言ったようにパターソンを流れていった

その奔流の音が私の中にある

それはフロスト(13)を闇に引き寄せた

時だったが そこで彼は見失われたのだ

我らに しかし余りにも遠くからで見えなかったが

彼の声は私の許に戻り続けている

それから突然の知らせで テッド

レトケ(14)が死んで漂っているのが発見されたという

ある人の水泳プールで夜中に しかし彼は

今尚 彼の詩行から立ち上がるのだ 私のために

そして今度は 動輪なしの糸車で

エリオット(15)が紡いだし ジャレル(16)は運び去られた

自動車によって 彼は好きだったのだ競技場を

見るのが それから私にはやって来たのだった

ある日庭の扉を叩く音が

して知らせが ベリマン(17)が

橋から身を投げたと 彼は二十年

前 私に引用してくれたものだ

あの一節を そこでは或る冗談がとクレイン(18)が書いていた

言葉なき隊列から落下する<sup>(19)</sup>

手を振りながら遺骨とヘンリーに

そして彼が私に語ってくれた全ての事柄に

私は夢を見た オーデン<sup>(20)</sup>が寝台に座っていたが

私には彼の言っていることが分らなかつた

彼は既に死んでいると誰かが

翌朝 私に話してくれる時まで

そしてマリアン・ムーア<sup>(21)</sup>が方舟に入り込んできた

パウンド<sup>(22)</sup>はもはや暗闇から言おうとはしなかつた

彼はかつて私が自由になる手助けをしてくれたのだ

私は私の周りの散文のことを考えた

するとデイヴィド・ジョウンズ<sup>(23)</sup>は休んでいたものだ

時の変るまで丘の下で

しかしアーサー<sup>(24)</sup>の眠りから彼は

私の後を蹤いてくる木霊を眼覚めさせる

ロウエル<sup>(25)</sup>は考えた 自分の方にやってくる

影立つ空を背にした輪郭はマンハッタンなのだ

しかしそれはタクシーの中で黒くなって消えた

ある時彼は自らの『備忘録』<sup>(26)</sup>を私に読んで聞かせた

番地を彼は告げた

運転手に 最後の言葉となつた

それであの注意深くこの上なく孤独な

漂泊者の言葉が私の許に残つたのだ

到る所でエリザベス

ビショップ<sup>(27)</sup>は 孤りで死の床についた

彼らはその一行<sup>いっしやう</sup>から早々と立ち去ってゆくのだつた

我らの年長者たちは それが私の胸にじーんときた

だが その針は我らの間を動いていて

常に不意打ちを食わせ

余りにも素早い打撃で眼に見えず

私の後から生れた友人には触れることはない

そしてジェイムズ・ライト<sup>(28)</sup>はいつもの暗くなった川の側<sup>そば</sup>で

ゴイサギが通り過ぎるのを聞いて

ローソクを霜の降りた道に

置いて 私の前で姿を消した

書くべき時だと覚った

彼らの物語の思い出を

署名入りで それで私フレインの前は戦場なのだ

ハワード・モス(29)は自分の名前が蝕まれるのを

感じて気付いたのだった どうしても

それ以上良くはならないのだと 彼は奇妙だった

たとえそれはそうだったにしろ 私には

今 ジミー・メリル(33)の声が聞こえる

後になってからの或るアリアのように

それで我らには分るのだ 彼は決して年老いることは

なからうと 私に話しかけた全ての人々の後では

グレイヴズ(30)は九十歳代になって己れを失い

以前死んでいたことを忘れ

来し方を無邪気に振り返った

かつては私にとつての案内者だったのだ

あの最後の夕べ冷たい路上で

彼の心についてのだった 見出して弾んだのだった

或る未だ知られていない詩を

それから窓越しに私に手を振ってくれたのだ

ネメロフ(31)は自らの詩よりも悲し気に

言った 新しい年はこれ以上悪くなることはなからうと

だから 苦痛が黒く偶然に起こることは

ないのだと その言葉が私私の心に残った

あの都市で我らは生れたのだ

一人一人彼らは皆去っていった

我らが共通に持っていた時間と言語から

それが私私を連れてきたのだった

スタフォード(32)は 自分の手が光を捕えているのを見詰め

彼らの後からこの季節へ

その最良の言葉のせいで彼らは

自ら遂に去ってゆくことは免れた

今のこの日が私から去ってゆくみたいには

それで彼らに聞こえていた明瞭な調べは

決して約束しなかったのだ 他ならぬ

簡潔な真物の音しか

それが私に付き纏うことになるのだろう

### 訳注

- (1) Oscar Williams (1900-64) 米国の詩人、詩華集編輯者、スクリブナー社の 'Little Treasury' 双書の編集主幹として *A Little Treasury of American Poetry* (1948) など多数の詩華集を編んだ。
- (2) Dylan Marlais Thomas (1914-53) ウェールズ生れの英国の詩人、詩の朗読に優れた才能を発揮、米国から招かれて三度目の朗読の旅で、ニューヨークで突然急死。
- (3) White Horse サクソン人が英国へ侵入した際の旗標とされ、白亜丘に刻まれている白馬の彫像。新石器・青銅器・鉄器時代のものがあり、イングランドのバークシャー州ウフイングトン (Uffington, Berkshire) のものが知られる。
- (4) Wallace Stevens (1879-1955) 米国の詩人、コネティカット州ハートフォードの損害保険会社の副社長で四〇歳すぎから次々に詩集を出し、形而上学的詩風と表現形式の特異性から「詩人の詩人」'Poet's poet' と称された。
- (5) the sparrow saying *Be thou me* この句そのものは、ステイーヴンズの全詩作品中にも、バイブルやシェイクスピアの作中にも見当たらない。
- (6) his long auroras 一九五一年に「全米図書賞」を受賞したステイーヴンズの詩集「秋の曙光」*The Auroras of Autumn* に収録の標題詩は、三行詩八連の詩十部から成る二四〇行の長篇力作詩。
- (7) Percy Bysshe Shelley (1792-1822) この英国の詩人についての説明は全く不要だが、詩における想像力の自律性と道徳上の機能を主張して、詩人を「世界の未承認の立法者」だとしたロマン主義詩論の典型である『詩の擁護』*A Defence of Poetry* (1821, 1840) と、夭逝のため未完に終わった長篇寓意詩『現世の凱旋行列』*The Triumph of Life* の作者に、マーウインが親昵したのは領けよう。
- (8) Arrowsmith シンクレア・ルイス (Harry Sinclair Lewis, 1885-1951) の傑作小説 *Arrowsmith* (1925) の主人公で、真理探究の情熱に燃える細菌学者。ここでは、作者ルイスを表しているとみられる。尚、この小説はピューリツァ賞に選ばれたが作者は、文学賞は作家を毒すると

- の理由で受賞を拒んだ。アメリカの作家として最初のノーベル文学賞を授与された(一九三〇年)。
- (9) Edwin Muir (1887-1959) スコットランド出身の英国詩人、批評家、優れた評論・郷土研究家。社会主義者になり、ニーチェを読み耽り、象徴的なイメーヂを駆使した詩作・創作を始めた。夫人ウィラ(Willa)とカフカやヘルマン・ブロッホの英訳もした。一九五〇—五年、ニューバトル・アビー・カレッジ学長も勤めた。
- (10) Sylvia Plath (1932-63) 米国の詩人、早熟の天才、スミス・カレッジを優等で卒業、ケンブリッジ大学大学院留学中に、後に(1984) 桂冠詩人となるテッド・ヒューズ(Ted Hughes, 1930-98) と結婚、二児の母となるが、一九六二年別居、翌年ガスオーヴンで自殺した。(告白詩人〈Confessional Poets〉の一人、死後出版の *Collected Poems* (1981) はビュリツァ賞受賞、マーウインはこの夫妻と親しかった。
- (11) William Carlos Williams (1883-1963) 米国の医者・詩人。生れ故郷で死ぬまで居住したニュージャージー州ラザフォード(Rutherford, New Jersey) の近くの町(12) を主題に、詩と散文を織り混ぜながらの現代の一大叙事詩が『パターンン』*Paterson* (5巻, 1946-58) —— 死後、未完の第六巻(1963) 出版。第四巻で、パターンンが川に流されかける。
- (12) Paterson かつて米国一の絹織物の町。この町を流れる 'The Passaic River' とその上流に滝がある。ウィリアムズの詩では人格化される。
- (13) Robert Frost (1874-1963) 生前四度もビュリツァ賞を受けたアメリカの国民詩人、ケネディ大統領の就任式には祝賀の自作詩を朗読した。
- (14) Theodore Roethke (1908-63) 米国の詩人、ミシガン州出身、多くの大学の教授を勤めた。内的風景を詠い、ビュリツァ賞、ボリンゲン賞、全米図書館賞など重要な賞を多く受けた。
- (15) Thomas Stearns Eliot (1888-1965) ミズリー州セントルイス(St Louis, Missouri) 生れ、英国に帰化した詩人・批評家、一九四八年ノーベル文学賞受賞。ジェイムズ・ジョイス(James Joyce 1882-1941) の『ユリシーズ』*Ulysses* (1922) が従来の小説の概念を変えたようにエリオットの『荒地』*The Waste Land* (1922) —— 「動輪なしの糸車」'on the rimless wheel' とはその詩の手法を指すか——は、それまでの詩の概念を一変させた。
- (16) Randall Jarrell (1914-65) テネシー州生れ、ヴァンダービルト大学卒、米国の詩人・批評家、戦争と歴史上の危機の犠牲者を多く題材とした。自動車事故に逢って急死(自殺説もある)。
- (17) John Berryman (1914-72) オクラホマ州出身の米国の

詩人、ハーバード大学、プリンストン大学などで教え、一九五四年以降ミネソタ大学教授、その在任中に、近くの橋から投身自殺を遂げた。(告白詩人)の一人。『七七夢の歌』77 *Dream Songs* (1964) はビュリツァ賞受賞、評価の高い、クレイン (81) の評伝 *Stephen Crane* (1950) がある。連想が次に続く。

- (18) *Stephen Crane* (1871-1900) ニュージャージー州出身の米国の小説家・詩人、ニューヨークで新聞記者を勤めながら創作、『街の女<sup>まち</sup>マギー』*Maggie: A Girl of the Streets* (1893) は、アメリカ最初の自然主義小説と謳われるし、二十世紀の新しい詩の先駆をなすとみられる詩集を出して出した。従軍記者としてスペインとの戦争などに出かけて病気になる天逝した。

- (19) *a jest falls from the speechless caravan* クレインの次の長篇『赤く武勲賞』*The Red Badge of Courage* (1895) — 南北戦争に従軍した北軍の無名の一兵卒ヘンリー・フレミング (Henry Fleming) を主人公に、印象主義風手法で描出した自然主義小説、標題は「戦傷」の意 — の、ある戦場の場面に現れる文のようにみえるが、この作品にも、ヘンリーの登場する短篇にも、クレインの全詩作中にも見当らない。

- (20) *Wystan Hugh Auden* (1907-73) 英国生れで一九三九年に米国に渡り、一九四六年に帰化した。文学活動の先端

を行った詩人で、オックスフォード大学の詩学教授 (一九五六年から五年間) に選ばれた。その就任講義「作ること、知ること及び判定すること」*"Making, Knowing and Judging"* (1956) は、三四篇のエッセイを収録した批評集『染物屋の手』*The Dyer's Hand* (1962) — 標題は、染物屋の手が染める対象に染まる意で、シェイクスピアのソネット第一一番に由来 — の序の二篇に続いて三番目に収められた。先述のようにマーウインの最初の詩集『ヤヌスのための仮面』*A Mask for Janus* (1952) を高く評価してくれたのは、このオーデンであった。

- (21) *Marianne Craig Moore* (1887-1972) セントルイス生れ、名門プリン・マー女子大卒の詩人・評論家、高度の知性と機智を駆使して、対象を冷静に観察して的確に詠った鏤骨影心の全一一九篇の詩作品は、本稿筆者が本誌第一八七号 (二〇〇四年七月) などで完訳済み。ラ・フォンテーヌの寓話の韻文訳 (一九五四) がある他、『詩集成』*Collected Poems* (1951) は、ビュリツァ賞、ボリンゲン賞、全米図書賞を一度に受けた。

- (22) *Ezra Weston Loomis Pound* (1885-1972) アイタホ州生れ、ペンシルヴェイニア州育ち、ペンシルヴェイニア大学で学び、教員になるが、すぐ故国を離れ、(国外居住者) *'expatriate'* として一九四五年まで、ロンドン (1908-20) ・パリ (1920-24) ・イタリアに滞在した。(イマジズ



ム)他始どの世界の新しい詩の運動の中心になり続けて、T・S・エリオット始め第一次世界大戦後の新しい詩人、作家に絶大な影響を与えた。

第二次世界大戦中イタリヤでファシズム宣伝の海外放送に携わったため、戦後、国事犯に問われたが、友人たちの奔走の効もあって精神異常者とされて裁判を免れ、病院に収容、十二年間軟禁入院生活を送り―その間多くの文人が訪問したその病院は、世に「エズラ大学」「Ezra University」と称された―一九五八年退院を許された後はイタリヤに戻ってそんで他界した。

(23) David Michael Jones (1895-1974) 英国の詩人・画家。文学活動は四十歳すぎからで二作目の難解な長詩『神に捧げた物』*The Anathemata* (1952) は、エリオットやオーデンに称讃された。

(24) Arthur ショーンズの別の詩集『眠れる君主他、断片集』*The Sleeping Lord and Other Fragments* (1974) の主人公アーサー王を指すだろう。

(25) Robert Traill Spence Lowell, Jr (1917-77) ポストンの名門出身の米國詩人。徹底した反戦論者で第二次世界大戦の際には徴兵忌避により投獄され、ヴェトナム戦争の時には一九六七年一〇月首都ワシントンの反戦集会で自作の詩を朗読した。優れた技巧の知的な作風で、自己を歴史と関係づけながら厳しく吟味する詩作は、六〇年代の

〈告白詩〉に大きな影響を及ぼした。ピュリツァ賞も全米図書賞も受けた。英国から帰国して空港からのタクシーの中で急逝した。それがマーウインの詩で言及されている。

(27) のピシヨップと長年親密な交流があり、彼女による実に感銘深い追悼文がある。乞参照文献の拙稿。

(26) ロウエルの詩集 *Notebooks 1967-88* (1969) 激変の時代におけるロウエルの個人的状況と現代の状況を扱った二七四篇の十四行詩を収録。

(27) Elizabeth Bishop (1911-79) マサチューセッツ州出身、ヴァッサー・カレッジ卒の米國詩人、学生時代に知り合った(21)のリアン・ムーアを「先生」として親交を続けた。世界各地を旅し、ブラジルには二十年近く住んだ。ムーアを見習って推敲に推敲を重ねた寡作詩人で、優れた技巧を駆使して自然界を鋭く洞察した。ピュリツァ賞、全米図書賞を受賞、ポルトガル語の翻訳書もある。乞参照文献の拙稿。

(28) James Arlington Wright (1927-80) オハイオ州出身の米國詩人、ケニヨン大学で〈新批評〉*New Criticism* の中心人物ランサム (John Crowe Ransom, 1888-1974) に、ワシントン大学大学院では(14)のレットケに学んだ。ニューヨーク市立大学で教えた。華やかな定型詩から自由詩に進む。この作品では、彼の詩集『川で集まろうか』

*Shall We Gather at the River* (1968) の中の詩に言及か。トラークル、ネルダー、ハッセ、シュトルム (Trakl, Neruda, Hesse, Storm) などの英訳もしている。マーウィンは彼とは同年で生涯の親友だった。二〇〇八年刊行の詩集『別世界から、ジェイムズ・ライト追悼詩篇』*From the Other World: Poems in Memory of James Wright* で彼に挽歌を捧げた。

- (29) Howard Moss (1922-87) ニューヨーク生れ、ウイスコンシン大学卒の米国詩人、「ニューヨーカー」誌の詩の欄を一九四八年以降担当した。『選詩集』*Selected Poems* (1971) で全米図書賞。優れた作家論『マルセル・ブルーストの幻灯機』*The Magic Lantern of Marcel Proust* (1962) 他がある。

- (30) Robert Ranke Graves (1895-1985) 英国の詩人・批評家・物語作家。父は Alfred Perceval Graves (1846-1931) でアイルランド民謡の研究者で詩人。オックスフォード大学卒、第一次世界大戦に従軍、戦後エジプトの大学で教え(一九二六年)、後スペイン領マヨルカ島に住む。そこで彼の息子の家庭教師をマーウィンが勤めた。『詩集成』*Collected Poems, 1914-1947* (1948) 他。オックスフォード詩学教授(一九六一-六六)、ギリシャ神話研究二卷 *The Greek Myths* (1955)、評論『白く女神』*The White Goddess* (1948)。共同で小出版社 Seizen Press を設

立した米国の詩人・批評家ローラ・ライディング (Laura Riding, 1901-85) との文学上の交流(一時同棲)も有名。

- (31) Howard Nemerov (1920-91) 米国のユタヤ系詩人、小説家。ニューヨーク生れ、ハーバード大学卒。ワシントン大学(セントルイス)の英文学教授などを勤めた。伝統的な詩型で人間と自然との関係を鋭く凝視した『詩集成』*Collected Poems* (1977) でピューリッツァ賞、全米図書賞を受ける。評論に『詩と虚構』*Poetry and Fiction* (1963)、『思考の模様』*Figures of Thought* (1978) など。

- (32) William Edgar Staford (1914-93) カンザス州出身の米国詩人、カンザス、アイオワ両大学で学び、第二次世界大戦中は良心的参戦忌避者として兵役を拒み、平和運動家として活動を続ける。オレゴン州ルイス・アンド・クラーク大学教授などを勤める。全米図書賞受賞の『闇の中を旅して』*Travelling Through the Dark* (1962) 他。詩集。

- (33) James Ingram Merrill (1926-95) ニューヨーク生れ、アマスト・カレッジ卒の米国の詩人、小説家、劇作家。(31) のネメロフやマーウィンなどと同傾向の作風で詩の形式を重視し、形而上的詩作を着々と重ねた。在学中は一年間第二次世界大戦に従軍。マルセル・ブルーストの修辞と感情の関係を分析して指導教授を感動させた。パード・カレッジで一年教えた後渡欧し、大抵はパリやヴェ

ニスで、自己発見の二年半旅行を行った。それが主題なのが、彼の回想録『風変わりな人』*A Different Person* (1993)。「夜々と日々」*Nights and Days* (1966) は全米図書賞受賞。ビュリツァ賞を受けた『神曲』*Divine Comedias* (1976) は続く二巻と共に全体が『サンドウヴァアの変わりゆく光』*The Changing Light at Sandover* (1982) として纏められ、全米図書批評家連合賞を受賞。米国の大証券会社「メリル・リンチ」Merrill Lynchの創業者の息子。アリゾナ州トゥーンン (Tucson, Arizona) で休暇を過して死す。

この作品は作者自身も表明している(同詩選集・二六八頁)ように、その標題と形式をチャョーサー(Geoffrey Chaucer, 1340?-1400)と同時代の、中世スコットランド最大の詩人ウィリアム・ダンバー(William Dunbar, c1460-c1520)の詩への「さり気ない言及を意図したもの」である。

ダンバーは所謂(スコットランドのチャョーサー風詩人たち)(Scottish Chaucerians)―彼らは皆、自由にスコットランド語を駆使して寓意的手法など中世文学の特質を發揮した―の典型の一人で、一四七七年に、セントアンドリュース

ズ大学を出てフランシスコ会修道士となる。一五〇〇年頃から宮廷に仕え、外交使節としてロンドンにも旅行するが、その頃から詩作を始めた。国王ジェイムズ四世とマーガレット・チューダーとの結婚の祝賀詩『薊と薔薇』*The Thistle and the Rose* [= *The Thistle and the Rose*, マザンはスコットランドの、バラはイングランドの、各々国花] (1503) や、寓意詩『黄金の小盾』*The Golden Targe* (1508) として哀歌 *The Lament for the Makaris*―これがマーウインの言及する詩―を書いて、後のスコットランドの詩人たちに大きな影響を及ぼした。

マーウインの「詩人への哀歌」は、一読明瞭なように、二行ずつ―一行目と二行目、三行目と四行目が―押韻する四行詩連で、各連共四行目の末語は全て 'me' 「私」で―拙訳ではその「私」に傍線を付した―「**me**」音で直前の三行目の末語の「**me**」音と正確に押韻する(但し唯一か所、第二七連―エドウィン・ミューアが出てくる連―の三行目は 'day' 「**ei**」でこれは擬似韻と言うべきだろうが)。

各三行目は、副詞―'ly' で終るので―これらは皆必ず 'me' と押韻する―が多いが、それ以外は 'agony' 'story' 'brevity' など名詞十二語、'free' 'funny' 'frosty' の形容詞三語、

複数回使用される語は、'see' 五回、'be' と 'he' が三回、'already'、'poetry'、'company'、'finally'、'y'、'me' — 同語同士は正式には押韻語としては使えない筈ではあるが — が各々二回使われる。

各連とも一行目と二行目には若干、擬似韻 ('friends' と 'veterans'、'on' と 'young' など) や視覚韻 ('then' と 'been'、'had' と 'head' など) もあるが、それら十四箇所以外の三七箇所は全く正確な押韻である。

この、I (主格) で始まって、'me' (目的格) で終る全二〇四行の作品は、八音節行が主体で一四八行、七音節行が三二行、九音節行が二四行で適宜配置され、最初から最後までコンマ、ピリオドなど如何なる句読点の類も皆無で、今、「終る」と述べたばかりだが実はその「終る」は、先へと開いた形で遠く続いてゆく未完の終り方を示す構造なのである。

マーウィンの「詩人への哀歌」は、標題でまずダンバーを哀悼し、本文で二六人の詩人たちを回顧しながら悼む作品であり、従って彼らの世界が作中で浮き沈みしながら混濁する(その有様が最小限に留めた訳注になるのだが)この「哀歌」の対象には当然今後も続々と、多くの詩人たちが、

が、そして近い将来作者自身が含まれると、示唆しているのだ。というわけで、この「哀歌」を〈完成〉させる任務は、読者に、後統の詩人たちに、托され期待されている、というのが、この「詩人への哀歌」と題する作品であった。そういうのが〈詩〉なのか、と気付けば、感動がいや増す作品になるのではなからうか。尚、標題の 'Makers' は古風な、廃れた意味で「詩人」(OED Maker, 5. = A poet)。もう一篇、〈詩〉だと思われる作品を挙げよう。『アメリカ最優秀詩選集』の二〇〇一年版 (pp.221-26) に選出された(初出 *Antioch Review* 誌)。

私は詩を書くのを止めた……

*I stopped writing poetry...*

詩ハ金銭上シカルベク報イテクレナイシ、ソノ形式ニ  
ヨツテ生ズル余白ノ無駄ノセイデ印刷ニ費用ガカカル、  
ソシテ殆ド常ニ人生ニツイテノ実体ノナイ概念ヲ広  
ル。

——マイルズ・ナ・グコパリー

(フラン・オブライエン)<sup>(1)</sup>

誰モ劣ツタ詩人ホド自信満々ナ者ハイナイ

——マルテイアーリス<sup>(2)</sup>

私は詩を書くのをやめた

まさに巧くなり始めた時に。最初に

私は押韻が巧みになった、それでそれを棄て去った。

それから詩行<sup>ライン</sup>と詩節<sup>スタンサ</sup>の構成に上達した——

大変巧くなったのでとにかく何かを言う必要が殆どなくな  
った。

私の目指す意味は現れたのだ

行間の空白に。

それで私はそれも、取り除いた。暗喩、換喩、

私より優れた人々の引喩による反響——そう、率直に言つて

私はそういうものの達人になったのだ かなり早くから

そこで私は書類引出しを空にして

修辭の方策、音楽の形式、

伝統の継続とか批評などを棄てて

私は唯 書いたのだ。遂に気付いてみたら

私は書いていた：散文を、他の誰もと同じ様に。

しかしそれは或る違いのある散文だった、散文でも豊かな、

その背後に横たわつてすっかり隠れている他の生命の備つ  
たもので、ちらりとも見えなかつた

(と私は思う) 読者には。改心して

尼僧になる娼婦のようにではない。私は見たことがある  
あの映画を。むしろ娼婦になる尼僧のようにだ。

私は詩を書くのをやめた

十六歳の時に(真面目に)、それから再び二十歳頃に

しかしたつたの六か月間だけ、もう一度

二十七歳で、それから、三十二、三十五、四十、そして四

十二歳で。

私は幾らでも知らせ続けられる。

ワタシは詩を書くのをやめた

ワタシが理解したと覺つた時に 浪漫派と象徴派の

詩を欠陥のない彫刻を客観的な詩を概念芸術を

純粹言語を告白体で哀歌調の様式をそして更に

ワタシがかなり十分に詩でやりたいと思つていたあらゆる

こと全てを

ワタシがいやしくも誰かにやつて欲しいと希つたことは既

に為されていたし遙かに  
巧みにドン・マーキス<sup>(3)</sup>によつてそのアーチーとメヒタベル<sup>(4)</sup>  
詩で果されていた

私は詩を書くのをやめた

他の誰もがそうした時に——九十年代の初めに、  
テレヴィイが文化よりも興味深くなつた時に。

私は詩を書くのをやめた

彼らがやつて来て私の詩のボタンを不活発にした時に

私は詩を書くのをやめた

結婚した時に——落ち着いたという意味だが——

メアリーランド州の法律が私に許してくれないので

私の生涯の恋人との結婚を——尤も私はここで

そのことに泣き事は言わないが——それにおそらく結婚は

私を駄目にするだろう

他の人たちを駄目にしてきたと思われるので——でも一つ

私は知っている——

誰かに非難してもらうのは確かに素晴らしいことだ

気楽にして靈感に抵抗したのは良くないからと 何をする  
にしる

折りにつけ立ち上れと言ひ張るのが相応しくない時には  
(補遺) ダッシュの使用をエミリー・デイキンソン<sup>(5)</sup>に感  
謝)

私は詩を書くのをやめた

私がそれまで最も望まなかつたことは

何か鼻持ちならない偽の自己を

発達させて声のように見せかけることでありそれは如何に

も芸術家たちが自らの様式がそれと定まるやいなや

その様式とそのせいで様式は個性の相関物ではない

と考えられそうなことに固執するやり方であり

単に世俗で満足される様式を越えた

卓越した問題を探求する方法は

完全な消耗 倦怠と風習と死なのだ

私は詩を書くのをやめた

私が私の嘆賞する人々から讃えられた時に。

望んでいるとおりの注目を浴びるのは恐ろしい事だ

それに値するかも知れないと自認する用意のない時は。詩はどのようにして愛から靈感を受けるだけではなくそれを形式と感情において模倣しているか、それについて詩人が常に実践している多くのやり方のうちでは、これはまさに最悪かも知れない。

私は詩を書くのをやめた。それが人々の散文の文体に何を果しているかが分つたので。ひゃあー。

私は詩を書くのをやめた——  
さて、基本的には、私は白人だからだ。私は白人であることを好まない、それは私が自由に行える選択ではないし

議論するとして 私には全く公正とばかりは思えない  
私が今すぐ白人でなくてはならないというのは十分前には  
そうでも

もし私が十五年前に生れていたとしても大抵の人種差別者が私を唯まず全くの害虫ユダヤ人奴<sup>め</sup>とは見做さなかつただろうが、いや、いいです、いいです  
私は讓歩しよう

その点は、私は文化の面で白人であり、あるいは何であれ  
エイ ママヨ<sup>(6)</sup>、

でもし気付かれなかつたらだが、これは単なる白人たちの場合ではない、詩の点で言えば。私にとにかく始めさせないで欲しい 語り部の伝統や何かを、<sup>(7)</sup>  
つまり、唯考えてみてよラップを——詩を それは伝達を

ものの見事に独自の選ばれた階層と  
共通の興味の範囲内に行つて 殆ど全くその他には及ばさ  
ないのだ、

それが大望として屹立して熱を冷ます人々には別だが。  
丁度シェイクスピアやダン<sup>(9)</sup>のように。何を白人は最近文化に寄与しただろうか？ポストモダンイズム？<sup>(10)</sup> 勘弁して。  
私自身が啓示を受けたのは覚つた時だつた

小型赤のコルヴェット<sup>(10)</sup>は私には一九七〇年代の初期以来出版されたどの詩よりも大きな意味を持ったのだと。酷く見窄らしいわけでもない通りで私は韻律法を習得したのだ、そこでは詩は生きている人々の生きた経験から自ずから發展した表現の様式ではなかつた、それは一定の型<sup>(11)</sup>だつた。  
さて、それはもうすんだ。それは終りにしよう。

私は詩を書くのをやめた

私が丁度勢いを失くした時に

それは実際何もかも全てというのではなく  
それよりもっと複雑だった。

私は詩を書くのをやめた

友人たちが亡くなりだした時に。友人の中には

美事に書く者がいた 自分の病気の状態について、

更に洞察力豊かに死ぬべき運命と自分自身の差し迫った

死について。或る者は怒りを籠めてそれらの不可視性につ

いて書き

証言の文学作品を創造したが そこでは我らは

アメリカの都市の街路を亡霊として歩くのはどのような気

がするものかを

学ぶことになる。或る者は詩を書いて自分の恋人を記念し  
たり

右派の上院議員連とか芸術基金機関を苛立たせた。

だが私が数えてみたところ 好きだった知人六十七人が

「エイズ関連病」で死んでいた、そして一度ならず

心底感じたのだった 私は彼らの苦痛とか死に反応できた

と 詩で。それは詩なのか？それは私なのか？一時期？私

は喜んで信じた

もしミルトンやシェリーやテニソンがそうすることが出来

たなら

それはやはり相当重要な意味を持てるだろうと。どうして

私が考えるべきなのか？

彼らの時代なら死を私の時代よりもっと扱い易い主題にし

ただろうなどと。

しかしやってみようと座り込むたびに私は絶望してはやめ

た。

時代の宣伝スローガン文句が政治上どれ程有利な

ものであれ それは私が探していた適切な言葉ではなかつ

たが

沈黙を韻文の詩行の中で聞こえるものにする或る方法では

あったが 私には決して見出せなかった。

今やそれさえも

私には思われる 一つの工夫のように、特別の訴えのよう

に。

放つとこう。ただ放つとけばいい。他の誰かにそうしても



らえばいいのだ。

私は詩を書くのをやめた

それでもまだ詩節は好きだ。その他のかっこいいもの——  
文彩、中間休止、句跨り——は、私は無しで暮らせる。  
でも詩節となると——うわーっ。

私は詩を書くのをやめた

私が初めてMLA<sup>(13)</sup>の会議に出た後で、

そこで彼らは彼らの所謂「主流の」と「支配的な」  
文学を朗読し理解するやり方を

攻撃していたのだが、私は一度も出逢ったことさえ

なかった。それは彼らが「書物」と言った時に意味するも

のようだった

私が「書物」という時の意味とは全く異なっていた——

「洗濯機」とか「ゴルフボール」と同じように異なっていた。  
た。

私は詩を書くのをやめた、それが純粹に社会学上と

経済学上の理由で批評によって蝕された時に。

私は詩を書くのをやめた、人々が学術論文を

書き始めた時に、フランク・オハラ<sup>(14)</sup>の『昼食詩集』の

読み方を説明するようなのを、そんなことは決して言っ  
ていなかったのだ

昼食時に読むべきだなどとは。私はやめた

詩を書くことを、それが通俗になった時に。私には合点が

ゆく

ロバート・フロスト<sup>(15)</sup>がケネディーの就任式で朗読したのは

しかし今は

イーサン・ホーク<sup>(16)</sup>が所蔵する『虚栄の市』を語っている

あなたの書物は寝台脇において。詩は添え物としてなのだ

商業文化への、そして名声への尊敬は

誰にとっても遙かに芳しくばつの悪いものなのだ<sup>(18)</sup>

国家に奉仕する詩どころではない。

私は詩を書くのをやめた、それを真面目に考えることが

知的な潑瀨さよりも知的な自己満足

示すように思われ始めた時に。

私は詩を書くのをやめた、うんざりさせられるようになっ

た時に。

私は詩を書くのをやめた

インターネットが電話機に取って替った時に

(今や誰も電話を所持し

それをどこへでも持ってゆくから、明らかなのだ

電話機が終りなのは)。テッド・ペリガン<sup>(19)</sup>は私が思うに

十四行詩を破壊したのだ 恋人に唯 受話機を取り上げて

自分に時々電話をかけるように

し向けることで——こうしてもはや必要はない 懇願する

ことも

誘うことも詩によつては——それで接近<sup>チヤンネル</sup>手段は

変化した、それは両方向に作用するのだ。今や我らは皆

(ゲイストレイトバイ奇妙<sup>(20)</sup>だが) 懇願したり誘ったりし

ている

小文字を使って<sup>(21)</sup> 何しろ最も自由な詩だけが交流が親密に

ならないうちに返信ボタンを押すのに慣れていて 詩を

消滅させられさえする時間があるのだがそれは何世紀も

かかって初めて詩の真物の聴衆を産み出すことによるのだ

私は詩を書くのをやめた

そうする約束をしたので。私は相当なものを讀んだ

一九八四年頃「傾聴亭<sup>イアライイ</sup>」で そこで私は誰かれなく勧め

たのだ

書くことを諦めるように——私が誓ったように——そして

それは巧くいった

實際大いに。その後私が詩のどの集りに出かけていっても

いつでも彼らは常に私に訊ねたものだ 私がまだ

書いていないのかどうか。私には分っていた それは演技

の一例だったと

それでそうしたのだ彼らも しかし私はこの感情に責め苛

まれ続けた

私は書き続けることで一つの原理を放棄していたのだ。

それは全く迷信だった、実際に病気だと感じるみたいな

病欠の電話をする時のように、しかし思うに私は犠牲者だ

ったのだらう

自分が言うことは本気だと思わねばならないという恐ろし

い確信の。

私は詩を書くのをやめた

知人の誰にも 少なくとも感動させたいと希った誰にも詩

を献呈してしまつた時に。

私は詩をまた書き始める約束をする 誰か新しい人々に出

逢うやいなや。

興味を掻き立ててくれる人々に、とにかく。

興味を掻き立ててくれる人々に出逢っただけで事情を言っ

ことは出来ないから、とにかく。

私は詩を書くのをやめた

しかしそれに背を向けて満足に思ったのは

ファシスト党の呪縛に陥った遠い故国に背を向けた時と同

じだった

それでもそよ風が時々私に詩の芳香を差し出してくれると

突如として私は亡命ロシア人と同じような郷愁を覚える

風変りな喜劇の中の あのバリで給仕をしている偉大な公

爵のような

時々私は訝る 実際恐ろしいことになるのではないかと

もし私ともう一行でも書いたりしたら

### 訳注

- (1) MYLES NA GCOPALEEN (FLANN O'BRIEN) Flann O'Brien  
(1911-66) アイルランドの小説家・ジャーナリスト、作  
品 *At Swim-Two-Birds* (1939) など。

- (2) MARTIAL Marcus Valerius Martialis (43?-104?) 古代  
ローマの風刺詩人・代表的エピグラム作家。

- (3) don marquis = Don [ald Robert Perry] Marquis (1878-  
1937) 米国のユーモア作家・詩人。作品 *The Old Soak*  
(1921) など。

- (4) archy and mehitabel ドン・マーキスの無韻詩 *archy  
and mehitabel* (1927) の主人公ゴキブリのアーチャーと猫  
のメヒタベル。ゴキブリなのでタイプの大文字が打てな  
い。

尚、この第三連は一人称が「I」ではなく小文字の「i」  
なので、「ワタシ」と表記した。

- (5) Emily Dickinson (1830-86) は、その詩作にやたらに  
ダッシュを使ったことで有名である。

- (6) *dammit* 上品に！ 拙訳した。

- (7) *griot* 西アフリカ諸部族で、部族や王の系譜などの口述  
伝承、及び物語、詩、歌、踊りなどを司る世襲階級の者。

- (8) *rap* (music) 一九七〇年代後半にニューヨークのDJ  
や都市部の黒人によって作られたファンクサウンドの一  
種、デイスコビートに乗って韻を踏んだ語呂のよいブラッ  
クイングリッシュを早口にしゃべる、ヒップホップ運動  
の発端となった。

- (9) John Donne (1573-1631) セントポール寺院の首席司  
祭 (1621-31) を勤めた英国の聖職者で、形而上派詩人の

指導者。

- (10) *Corvette* 米国GM社製のスポーツカー。
- (11) *caesura* 通例、詩の行の中間での、特に意味の切れ目による休止で、律読法では垂直線を二本引いて示す。例  
"know them thyself || presume not God to scan."  
(12) *enjambment* 詩の一行の意味、構文が統語上の休止なしに次行に跨りて続くもの。
- (13) MLA = Modern Language Association 米国の近代語学會、一八八三年創立。
- (14) Frank O'Hara (1926-66) ポルチモア生れの米国詩人・批評家、ハーバード、ミシガン両大学に学び、ニューヨークの近代美術館に勤務、ジャックソン・ポロック (Jackson Pollock, 1912-56) を思わせるような伝達を行う。ニューヨークの環境との自伝的関係を詠って特色を示した。*Lunch Poems* (1964) 出版の後、事故で急死した。『選詩集』*Selected Poems* (1973) は、全米図書賞を受賞。
- (15) Robert Frost 前掲マーウインの詩の訳注(13) 参照。
- (16) Ethan Hawke (1970-) テキサス州出身の米国の俳優、「今を生きる」「ハムレット」「ガタカ」など多くの作品に出演している。
- (17) *Vanity Fair* ション・パニヤンの寓意物語『天路歷程』(John Bunyan [1628-88]'s *Pilgrim's Progress* [1678, '84]) に出る町の市に由来する標題のサッカー (William

Makepeace Thackeray, 1811-63) の小説 (1847-48)。

「*pride*」では「虚栄心」の發揮に言及のつもりか。

- (18) *deliciously embarrassing* 「芳しくばつこの悪さ」という撞着語句 (*oxymoron*) が印象深<sup>い</sup>。
  - (19) Ted Berrigan (1934-83)。ロードアイランド州プロヴァイデンス生れの米国の詩人。 *The Sonnets* (1964), *The Drunken Boat* (1974) など二十冊以上の詩集。
  - (20) (*gay str8 bi-curious*) 'gay' は「同性愛者」。'str8' = 'straight' 「同性愛でなく、正常な人」。'bi' = 'bisexual' 「両性愛者」。この括弧内は「同性愛者正常者奇妙な両性愛者」つまり「性愛に関する全ての人」。
  - (21) *in lower case* 大文字を使わないこと。
- この詩について作者自身、同詩選集 (pp.275-76) で、書かれず仕舞いになるところだった、何しろ「私は詩を書くのをやめた」のだから、とユーモアたっぷりに語っている。
- 「この詩の中で提示される証言、説明、弁明の大半は、正直で誠実で真物であり、人が自分自身の行動に対して自らに真摯に説明しようとする時に言わなければならないと思える全てである」。優れた詩人なら気付いているように「最初の

人というのは奇妙な二重性を余儀なくされて、実際の感情と記憶の水門を開ける一方、自らを文学上の人物として経験する居心地の悪い立場に置く。そういう不愉快が、人々が詩人の声について語る時に私が主に考えることだ」

そして、彼は、詩を書く際には言葉の力の〈全体性〉に魅惑され、言語の働き具合を考える。彼は、詩節「連」と句跨り、行間韻を好み、それで他の作家の様式を意図して皮肉って模倣できることになる。「詩行中止の際に私がよく示す奇妙な躊躇は、単なる病的執着（その通りだが）ではなく、私がいかに言わねばならぬ重要な事なのだ」。

雄弁な言わば〈自注〉共々、前掲のマーウインの作品とはまた異質な、しかし紛れもない〈詩〉として、今回並べ取り上げた。

「私は詩を書くのをやめた」という一行で始まる、詩行数が一行から二五行までの様々な一八連「詩節」から成る総数一八五行の長詩。第一四連の二五行には、中にも「私は詩を書くのをやめた」が五回入っていて、この作品では合計二三回、この「作者」は「詩を書くのをやめた」と宣言する〈詩〉を書いたのである。そのやめた理由の一つ一つがなかなか振るって、皮肉が効き、この詩を支えて

いるだろう。それによって作者は再び、詩を書く活力を得ることが出来たのであった。「皮肉がなければ」と、かつてフランスのノーベル賞受賞作家アナトール・フランス (Anatole France, 1844—1924) が名言を披露していた、「この世は小鳥たちのいない森のようなものになるだろう、皮肉とは反省の楽しさであり、叡智の欲びである」(…sans l'ironie le monde serait comme une forêt sans oiseaux. sagesse. \*)

「私は詩を書くのをやめた」のような様々な小鳥の飛び交う森は、楽しい陽気な反省と、欲びに繋がる叡智の持ち主でなければ産み出せない。

この作品も最後に終止符がなく、外に開いている。

作者は、バーナード・ウエスト (Bernard West, 1952-)、テキサス州ヒューストン生れ、ヴァージニア州アーリントン育ち、ジョージンズ・ホプキンス大学で創作でM.A、アメリカン大学で文学研究でPh.D取得、ワシントンDCのコーコラン芸術・意匠カレッジで学術研究の教授を勤め、映画と学際人文学研究の課程で教えている。ロサンジェルズ日刊紙「芸術誌」連載のエッセイは、『誇張症—当代ア

アメリカの民衆芸術における幻想、寓話及び嘘っぱち』  
*Mythomania: Fantasies, Fables, and Sheer Lies in Contemporary American Popular Art* (Art issues, Press, 1996)  
 として纏められた。詩集に『セレナーデ』*Serenade* (Z Press, 1979)。「同詩選集同頁に依る」

\* 「タン」紙 *Le Temps* の一八八九年四月二二日号に発表された「ラブレール」*"Raberais"* の中で、『文学生活』*La vie littéraire* の第三巻に収録された(カルマン・レイ版の「アナートル・フランス全著作集」第七巻 四三三ページ)。

参考文献

James D. Hart, *The Oxford Companion to American Literature*, 5th. ed. 1983.  
 研究社『英米文学辞典』第三版(一九八五)

森田孟「エリザベス・ビショップとマリアン・ムーア」  
*(American Literature Tsukuba, No.2, 1987, pp.40-50.)*  
 同「二篇の『魚』—マリアン・ムーアとエリザベス・ビショップ」(『文藝言語研究・文藝篇27』1995, pp.47-68.)

同「『ヴィクターの犬』—ビショップに捧げられたメリルの詩」(*American Literature Tsukuba, No.7, 1994, pp.3-10.*)

同「染み一つなき完全無欠—オーデンとムーアの交流」(『筑波イギリス文学』第二号、1996, pp.131-41.)

同「真摯な共同作業の成果—ビショップに捧げられたロウエルのソネット四連作」(『成城文藝』第二二二号、2010, pp.1-16.)

同「真物への道程—引用と改作——〈モダニズム〉の先へ—マリアン・ムーア作品の詩観——」(『Epistemological Frameworkと英米文学』研究会、2003, pp.261-84.)

同「ケネス・コックホ「コック」詩とこの芸術」上・下」(『新文学風景』No.5, 1982, pp.143-52 / No.6, 1984, pp.101-11.)  
 「詩の創作行為に関わる全ての知識」を備えたものとして書かれた全二二連、総計三七三行を詳注付きで拙訳した。

本誌前号(第三二六号)誤植訂正

頁	段	行目
21	下	9
30	上	5
30	上	14

∴ 更けてゆく詩 ↓ 時  
 ∴ Paris ↓ Paris  
 ∴ 個有名詞 ↓ 個